

はじめに	pp. iii- vi
<b>第 I 部 忘却の政治/ 依存の抑圧</b>	
序論 フェミニズム理論と政治思想	pp. 1-3
第一章 包摂と排除の論理 現代シティズンシップ論における、反依存の論理	pp. 4- 24
シティズンシップ論からの出発	
第一節 統一体への包摂 暴力による包摂/ 包摂の暴力	
第二節 現代シティズンシップ論における、新たな包摂への課題	
第三節 新しい共和主義の登場 市民の責任論がもつ包摂性	
第四節 リベラルな責任論の応答不可能性	
第五節 依存を排除する包摂の原理	
第二章 自由論と主権論批判	pp. 25- 57
私的領域における自由と公的領域における責任	
第一節 自由への問い 「責任」からの問い直し	
第二節 自由意志と公私二元論 パーリン、テイラー、フラスマン	
第三節 自由な抑圧 フェミニズムの視点	
第四節 不自由な自由論 自由意志と主権国家の結託	
第三章 リベラリズムとフェミニズム	pp. 58- 87
リベラル・フェミニズムは存在するのか？	
第一節 公私二元論の近代と現代 ペイトマンとブラウン	
第二節 リベラリズム「と」フェミニズム	
第三節 リベラリズムの「批判力」	
第四節 リベラルな自己と社会の構想	
第五節 反転するリベラリズム	
第六節 「主体」への異議申し立て	
小括 忘却された主体の来歴	pp. 88-89
<b>第 II 部 家族から、社会の構想にむけて ケアの倫理の社会的可能性</b>	
序論 なぜ、家族への注視なのか	pp. 90- 92
第一章 ケアの倫理からの出発	pp.93- 118
家族の両義性	
第一節 相互依存的関係性と家族	
第二節 ケアの端緒としての、他者の存在	
第三節 ケアという実践	
第四節 ケアの倫理をめぐる異論	
第五節 公私二元論批判による反論	
第六節 ケアの倫理から、社会的責任論へ	
第二章 私的領域の主権化/ 母の自然化	pp.119-140
ケアの倫理の「私」化	
第一節 愛と正義からなる世界	

第二節 愛の力 母と「自然」の置換	
第三節 転倒した愛の物語	
第四節 母の愛 母性愛から、母的な思考へ	
第三章 ケア・家族の脱私化と社会的可能性	pp. 141- 159
愛の実践から、社会の構想へ	
第一節 家族の時間 守ろうとする愛 preservative love とホーム home	
第二節 家族のことは 他者の集い・多様な声の交錯・想起	
第三節 家族からの出発	
小括 家族の脱私化から、脱国家化へ	pp. 160- 161
<b>第 III 部 フェミニズムと脱主権国家論 相互依存的個人から、新しい共同性へ</b>	
序論 主権国家・近代的主体・近代家族制度の三位一体をほどく	pp. 162-164
第一章 フェミニズムが構想する平和 女は世界を救えるか？再考	pp. 165-177
政治思想と暴力性の消去	
第一節 女性「と」平和	
第二節 反・本質主義的なケア論へ 自律的な主体批判という観点から	
第三節 近代的な主権国家論の誕生と近代的主体の誕生	
第四節 母的思考から、平和の構想へ	
第二章 平和を求める 安全保障からケアへ	pp. 178- 193
人間の安全保障？	
第一節 エコノミーの暴力	
第二節 暴力のエコノミー：脅し の政治？	
第三節 安全保障 security から、ケアへ	
第四節 遅れる正義 修復的正義 restorable justice	
第三章 ケアから人権へ 脱領土化と、普遍性の時間的様態	pp. 194- 215
ケアは国境を超えるのか？	
第一節 人権をめぐる三つのアポリア	
第二節 ポジティブな人権論としての、承認の政治	
第三節 ケアの倫理から、証言の政治へ	
第四章 フェミニズム理論の可能性	pp.216- 238
新しいフェミニズムの波	
第一節 フェミニズムと国際的連帯	
第二節 「多文化主義 vs フェミニズム」再論	
第三節 合衆国におけるアフガニスタン女性の抹消と「主体」の論理	
第四節 バトラーによる「主体」批判	
第五節 倫理的責任論から、集合的責任論へ	
<b>終章 新しい共同性にむけて</b>	pp. 239- 246
参考文献一覧	pp. 247- 260